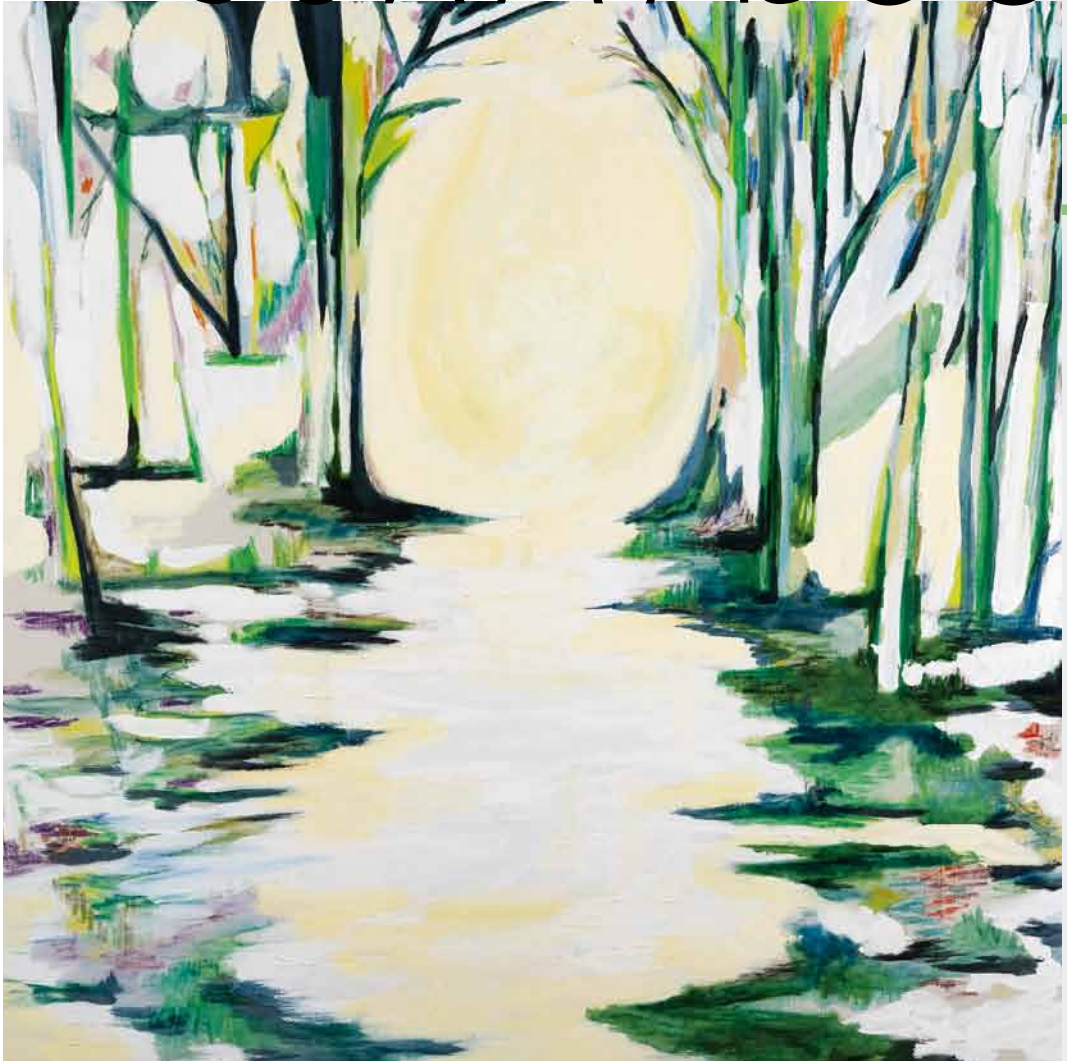


SETOGUCHI AKIKO

SUAM / ROOT



Vol.

1

瀬戸口 朗子

— 幕間 —

佐賀大学美術館

SUAM
THE SAGA UNIVERSITY ART MUSEUM

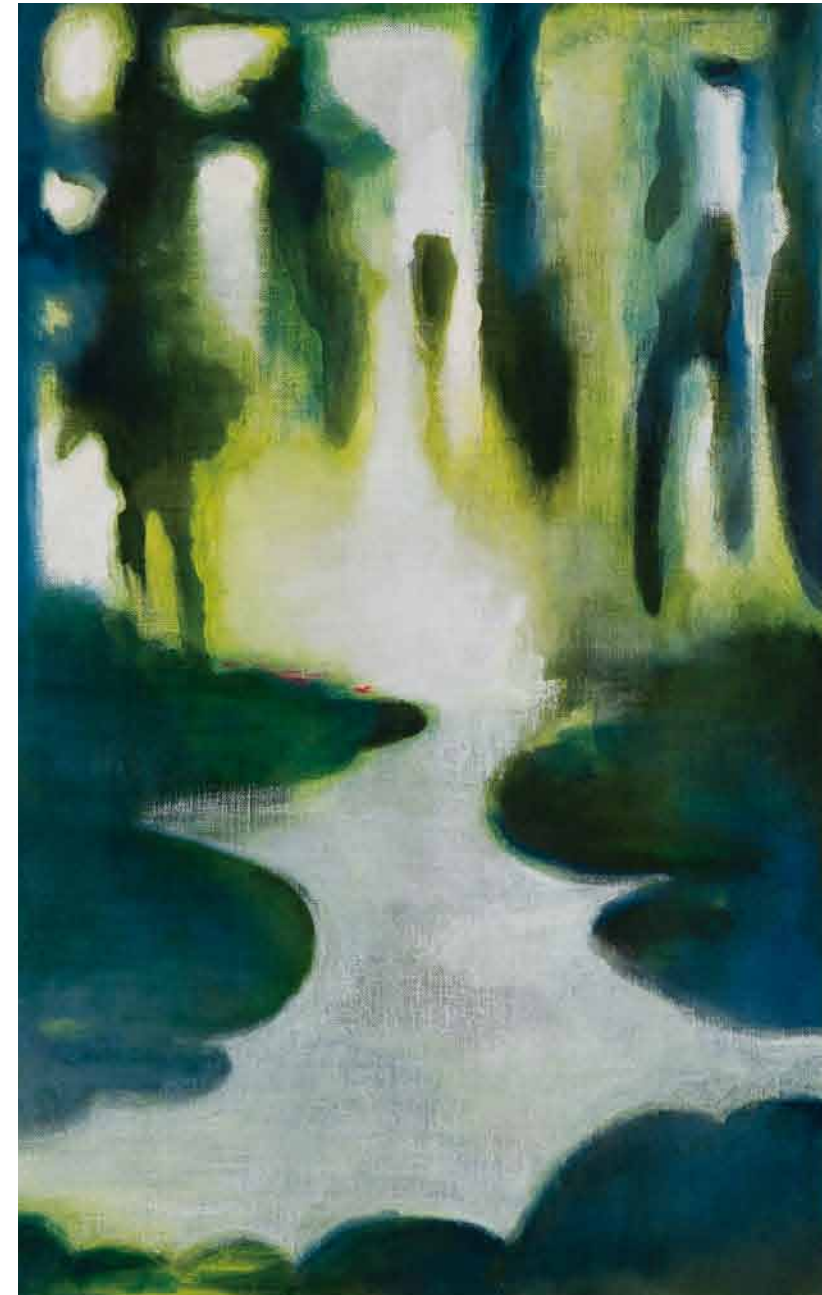


《scape》2005 油彩、綿布 53.0×45.5 cm 作家蔵
scape, 2005, Oil on cotton, 53.0×45.5 cm, Collection of the Artist

佐賀大学美術館では、地域の芸術文化交流地点として、様々な人々が地域ゆかりの文化・芸術に触れることを目的に、九州を拠点に活動をする若手・中堅アーティストを個展形式で紹介する企画展「SUAM/ROOT」を開催します。「ROOT」は、根や本質のほかに応援するという意味を持ち、本展では国籍や出身、表現手法を問わず、地域に根差して活動続ける今後の活躍が期待されるアーティストを紹介していきます。

第1回目は、2002年に佐賀大学文化教育学部美術工芸課程西洋画専攻を卒業し、佐賀や福岡を拠点に活動続ける瀬戸口朗子です。瀬戸口は、「大事な事や物」を一貫したテーマとして、平面作品を中心に制作を行っています。これまでの作品のタイトルや制作態度にも表れている表裏一体や二律背反といった相反する物事を共存させるとらえ方を肯定する姿勢は、物事の価値や在り方の複雑さに対するしなやかな向き合い方ともとれます。光と闇、前と後ろ、興味と戸惑い、喜びと恐れ、華やかさとさみしさ、それぞれ移ろいや変化の中にあるはずの物事や感情も、私たちの思いや経験から二分化や固定されてしまうことがあります。瀬戸口の作品を通して世界を見ることで、私たちそれぞれが対峙する出来事や世界の複雑さを少しだけときほぐすきっかけとなるのではないのでしょうか。

最後に、本展覧会の開催にあたり、作家である瀬戸口朗子氏、ならびに多大なご教示と協力を賜りました関係各位に、心よりお礼申し上げます。



《森の入口》2015 油彩、キャンヴァス 53.0×41.0 cm 作家蔵
the entrance to the forest, 2015, Oil on canvas, 53.0×41.0 cm, Collection of the Artist



《scape》2005 油彩、綿布 145.5×112.0 cm 作家蔵
scape, 2005, Oil on cotton, 145.5×112.0 cm, Collection of the Artist



《森の中庭》2013 油彩、キャンヴァス 91.0×72.7 cm 作家蔵
the courtyard in the forest, 2013, Oil on canvas, 91.0×72.7 cm,
Collection of the Artist



《scape》2005 アクリル・胡粉、綿布 72.8×103.0 cm 作家蔵
scape, 2005, Acrylic and gofun on cotton, 72.8×103.0 cm,
Collection of the Artist



《雲間》2013 アクリル・胡粉、キャンヴァス 130.3×162.1 cm 作家蔵
through the clouds, Acrylic and gofun on canvas, 130.3×162.1 cm, Collection of the Artist



《森の入口》2015 油彩、キャンヴァス 130.3×162.1 cm 作家蔵
the entrance to the forest, 2015, Oil on canvas, 130.3×162.1 cm,
Collection of the Artist



《森の入口 奈落》2017
油彩、キャンヴァス 53.0×45.5 cm 作家蔵
the entrance to the forest, the abyss,
2017, Oil on canvas, 53.0×45.5 cm, Collection of the Artist

わからないままでもいいこと

五十嵐 純 [本展企画／佐賀大学美術館 学芸員]

“旅人はどこかの森でたまたま迷っても、あちらの方、こちらの方と、ぐるぐるさまよい歩いてはなりませんし、一個所に足をとめていることはなおさらいけません。いつも同じ方向にできるだけまっすぐ歩き、その方向をとる決心をしたのがおそらくはじめはただの偶然にすぎなかったとしても、つまらない理由でその方向を変えてはならないのです。というのも、このやり方によれば、旅人が行きたいと思うところへちようどうまく行くことはないにしても、少なくともけっきょくはどこかに行き着くでしょうし、そのほうが森のまんなかにいるよりはほんとうにましだと思われまますから。”(デカルト『方法序説』第三部 三宅徳嘉・小池健男共訳／白水社)

上記は、通称「森の中のデカルト」と呼ばれるデカルトの有名な行動規範として、判断と初志貫徹の重要性を問うものとしてしばしば引用される。しかし、実際に森の中で迷わずに動けるか。当然、森は迷いの比喩であるわけだが、人生の迷いの中ではないわからないままでいいこともあるのではないか。

瀬戸口朗子は、「大切な事や物」を一貫したテーマとして、2010年代前半までは明るく柔らかな色彩を用いて山や雲、身体のシルエットなどを思わせる形態を数多く描いてきた。2010年代中頃から近年にかけては、作品名にも現れているように「森」の風景がより具体的に描かれている。その多くは、木々や地面をあらわす黒や青みがかった濃緑と、それとは対照的な強い白がハレーションを起こしており、暗い森の中に立ち、強い光が差し込む方向を見ている視点を感じさせる。多くの人にとって「森の入り口」といわれれば、森の外側から見た内側との境界を想像するだろう。しかし、瀬戸口の描く〈森の入口〉はどうやら、森の内側から見た外側との境界を「入り口」として見ているようだ。鬱蒼とした森の中から、光あふれる外側の世界を見たその場所を〈森の入口〉と呼ぶ。立ち位置によって変わる曖昧な場所を、曖昧なままでおこうとする瀬戸口の意図だろうか。そしてもうひとつ、瀬戸口の作品を通してみる

ことができるのが、光を描いているということである。通常、私たちがものを目で見るときは、対象に反射した光を網膜がとらえ、像として認識する。つまり光によってものをみることができる。絵画の歴史においても光を描くことは、神を示したり、モチーフを立体的に見せるための技術であったり、あるいは印象派の画家たちは変化する光そのものをとらえようとした。しかし、「光のペールやつぶたちは、見たいものをいったん視線から守るものとしてそこに現れます。」と話す瀬戸口の言葉からは、光は何かを表すためのものではなく、対象を覆い隠すためのものとして用いられる。見たいもの、それが何であるのか、今はまだ分からなくてもいいのだと言うかのよう。

現在、瀬戸口は2児の母でもある。多くの画家や作家にとって旅や新しい学び、人生の転機によって作品が変化することがあるように、出産・子育てという経験も作品に変化を与えるだろう。育児への明確な答えを持つ親などいないと思うが、これもまた「わからなさ」の連続である。人智の及ばぬ場所と形容される「森」の中に身を置く視点は、その心境の反映かもしれない。そこに差す光の先にあるのは希望か。いや、希望とも絶望とも仮定せず、どちらでもないままで一旦置いておくのだ。

不安定なことは居心地が悪い。だから人は右や左、前や後を定め、名がないものには名前をつけ、移ろうものを留めたがる。曖昧であることは往々にしてネガティブなこととして捉えられがちだが、わからないものをわからないということも勇気がある。瀬戸口は制作の姿勢に、二律背反や表裏一体と言った両義的な思考を取り入れているというが、これはものごとを片方の価値観に留まらせるのではなく、曖昧であることを積極的に受け入れる姿勢とも言えるだろう。瀬戸口の絵画が見るものを惹きつけるのは、私たちの経験や思考から、本来未分化であるはずの物事を固定してしまっている思い込みを解きほぐし、「わからなさ」を肯定するその柔軟な視点からなのかもしれない。

実際の制作では記憶を辿りながら描きだすこともあり、内面化された感覚をたよりにし

目前にあるものそれ自体ではなく、そのものがそこにあることで出来る雰囲気や、場の空気そのものを描きたいと思っていました。ただのように描けばよいか見当がつかなかったたので、自然の事物の持つ有機的な線や形を借りて描くことにしました。そのうち、ものから借用する必要はないのではないか、むしろものを直視することが違うのではないかと考えに至り、簾といった視線を遮るモチーフを画面に描き込むことを始めました。直視すると見ることが出来ない夜空のかそけき星々のように、視線をずらしたところに存在が見つかるものがあるのではないか。見ようとしても見えない薄暮の時間に存在する事物たち。視界が遮られることや光の作用によって見えてくるものもあるのではないのでしょうか。

瀬戸口朗子

て画面を作り上げていきます。生まれ育った家の側を流れる小川では水辺の楽しさを知りました。水面に揺らめく光と見るものを映し返す鏡面、反射する光の奥には吸い込まれるような力強さをもつ魅惑的な奈落。また、幼少期の私には抛り所としての森がありました。森というには浅い、植林されて間もない低木林に囲まれた坂を抜けてたどり着く先には中庭のように開けた場所があり、そこは安心感と高揚感、覚束ない心細さと緊張感を同時に呼び起こし、私はそこに自分の居場所を見つけた気がしました。

これは森の入口である
きつとさらに下が静まるころでは それ
はうろつき 歩くことができる
私は広場になめらかに外出し 足を盗まれるかもしれない
驚いたことに 私は快適で大きい家を建てる
ことができる
外に行く事実があるかもしれない
たとえそれが どちらに自由であっても
きつとどこかで それが輝いたことは 確かである

Profile

瀬戸口 朗子
SETOGUCHI Akiko

1980年佐賀県嬉野市生まれ。佐賀大学文化教育学部美術・工芸課程西洋画専攻卒業。自らの内にあるアンビバレントな感情について、「森」を描く事を通して表現している。主な個展に、「駆け出す足 眠る少女 見ている森」(2023年、EUREKA.fukuoka.otemon、福岡県)、「瀬戸口朗子展」(2017年、画廊 憩ひ、佐賀県)、「きつとどこかでそれが輝いたことは確かである」(2015年、ギャラリーおいし、福岡県) など。主なグループ展に、「郷土の美術をみる・しる・まなぶ 番外編 ARS/NATURA -「風景」の向こう側-」(2017年、福岡県立美術館、福岡県)、「HOTEL ART IN」(2017年、MEIJIKAN GALLERY CHIGGO、福岡県)、「DANDANS Exhibition No.12 A Collective of Japanese Emerging Artists」(2014年、von Zanthier & Schulz、ベルリン、ドイツ)、「団・DANS No.8 hierher dorthin -こちらへ、あちらへ-」(2011年、ドイツ文化センター、東京都)、「必然性のある偶然」(2011年、PERHAPS GALLERY、佐賀県) など。

－ 展覧会 －

SUAM/ROOT Vol.1 瀬戸口 朗子 － 幕間 －

会期：2024年6月18日（火）～9月8日（日）

会場：佐賀大学美術館 特別展示室

主催：佐賀大学美術館

企画：五十嵐 純（佐賀大学美術館）

－ 記録集 －

2024年6月18日発行

企画・発行：佐賀大学美術館

編集・執筆：五十嵐 純（佐賀大学美術館）

デザイン：殿岡 渉（あしか図案）

印刷・製本：大同印刷株式会社

写真：藤本 幸一郎

佐賀大学美術館

〒840-8502 佐賀県佐賀市本庄町1

1, Honjomachi, Saga City, Saga, Japan 840-8502

TEL：0952-28-8333 FAX：0952-28-8215

<https://museum.saga-u.ac.jp/>